この冊子は全7ページあります

画家の略歴

(PaintersBr01.pdf)

1. 歴史区分

現代では、絵を描くことを個人の楽しみにしている人が多くいます。先史時代まで遡ると、人類社会の文化活動として、洞穴内で発見された壁画や、南米ナスカの地上絵も、絵画と考えることができます。記録が残るようになった有史時代以降、絵画の作画と鑑賞とを現代風に理解するため、「誰が、いつ、何処に、何を描くか」の四つの情報項目を立てて説明することにします。まず、日本史の時代区分は、下のように分けられています。

時代区分	時 代 の 通 称	西 暦 年	特 記 事 項
先史時代	縄文時代に当たる		縄文を絵画模様と見る
古代	弥生時代	紀元前一万年前から	宗教画が始まる
	古墳時代	三世紀末から	高松塚古墳壁画
	平安時代	794～1185	古事記完成は 712 年
中世	鎌倉・室町時代	1185～1603	
近世	江戸時代または徳川時代	1603～1867	版画が庶民に親しまれた
近代	明治維新から敗戦まで	1868～1945	写真の利用が普及した
現代	戦後	1945～	パソコンモニタを利用する絵画

2. 絵師の身分

絵師（えし）、今風に言えば画家のことですが、絵を描かける技能があっても、安定した生計が立てられることは簡単ではありません。一つの方法は、権力者に仕え、権力者の意向に沿った絵画を制作する職人として認められることでした。その権力者は、王侯貴族・武家・資産家・宗教団体などであって、結果として画題の選択肢が限られます。宗教画がそうです。画家の自由な発想を抑え、保守的な画風を伝統とするようになります。画家の身分に権威付けをするように、例えば、狩野派のような画家集団が、一般社会からの尊敬を受ける形態を育てました。

3. 版画の出現

絵画の制作は、基本的には画家の個人作業であって、現物は一点です。複製技術が普及していなかった近代以前、有名な絵画は、どこにあるかの口伝えの情報、また、その場所に行った人の模写を介して一般の人に知られるようになりました。名所旧跡の風景画も、同じように、その場所に行って見る景観を模写したものです。これに対して、日本の木版浮世絵は、現代の出版・印刷システムと同じように、多くの部数の摺りが制作され、**かわら版**として広く一般庶民に親しまれました。この制作工程は、絵師、彫り師（ほりし）、摺り師（すりし）、そして、全体をまとめる版元（はんもと）の共同作業でした。摺りの段階で、墨一色で済ます簡易なかわら版の発展として、色の種類を変えた複数の版の重ね摺りが鈴木晴信らによって 1765 に開発され、こちらを**錦絵**と呼びました。この制作は、現代の多色グラビア印刷と同じ方式です。絵師は、錦絵用の下絵を描くのですが、一枚もの絵画の作成を残すこともあって、これを肉筆画と言います。

号名	氏名	生没(年)	備考 (代表作など)
春信	鈴木春信	1724-1770 (46)	
鳥居清長	鳥居清長	1752-1815 (64),	
	細田栄之	1756-1829 (73)	
春朗	勝川春朗		北斎の若い時代の号、1794 年まで
北斎	葛飾北斎	1760-1849 (90)	富岳三十六景ほか
北寿	登亭北寿		北斎の弟子
広重	歌川(安藤)広重	1797-1858 (62)	東海道五十三次
(重宣)	二代広重	1826-?	六十四州名所図
(重政)	三代広重	1769-1825 (57),	開化絵
豊国	歌川豊国		大角力両国橋渡の図
豊重(二代豊国)	歌川豊重	1802-?,	
国貞	歌川国貞	1786-?	
国直	歌川国直	1793-1854 (60)	
国政	歌川国政	?-1810 (38)	(開化絵は四代国政)
国安	歌川国安	1794-1832 (39)	
豊広	歌川豊広	?-1829 (65)	
芳艶	歌川芳艶,		
芳政	歌川芳政		
芳勝	歌川芳勝		
貞秀	歌川貞秀	1807-1878?	開化絵
貞広	歌川貞広		
貞信,	歌川貞信		
貞虎	歌川貞虎		
貞景	歌川貞景		
貞房	歌川貞房		
国周	歌川国周	1835-?	
豊春	歌川豊春	?-1814 (80)	
国丸	歌川国丸	?-1829 (37),	
芳房	歌川芳房	?-1860 (24)	
国芳	歌川国芳	1797-1861 (69)	
英泉	渓斎英泉	1791-1848 (58)	
清親	小林清親	1847-1915 (69)	日本橋(近代版画)
長春	宮川長春	?-1753 (71)	
政美	北尾政美	1764-1824 (64)	
探景	井上安治		清親の弟子
北渓	魚屋北渓	?-1850 (70)	
豊信	石川豊信	?-1785 (75)	
月岡雪鼎	月岡雪鼎	?-1786 (77),	
菊川英山	菊川英山	1787-?	
柳川重信	柳川重信	1787-?	
清峰	二代目清満	1788-?	
石燕	鳥山石燕	?-1788 (77),	
恋川春町	恋川春町	?-1789 (46),	
小松屋百亀	小松屋百亀	?-1793 (80+)	
歌麿	喜田川歌麿	1753-1806 (53)	北川豊章

春英	勝川春英	1762-1819 (58)	
春章	勝川春章	1726-1792 (67),	
春亭	勝川春亭	?-1820 (51),	
政演 (56),	北尾政演（山東京伝）	?-1816 (56),	
司馬江漢	安藤峻	1748?-1818 (72)	春重
重政	北尾重政	?-1820 (82),	
窪俊満	窪俊満	?-1820 (64),	
亜欧堂田善	亜欧堂田善	?-1822(75)	
墨僊	墨僊	?-1824(50),	
政美	北尾政美	?-1824(64),	（紹真鍬形薫斎）
鳥文斎	（細田）栄之	?-1829 (74)	
川芳政幾	川芳政幾	1833-?	
五岳	岳亭五岳		
大蘇芳年	大蘇芳年	1839-?	
長谷川雪旦	長谷川雪旦	?-1843 (66)	
尾形月耕	尾形月耕	1859	
菊川英山	菊川英山	?-1867(81)	
二代清峰	二代清峰	?-1867 (32),	
国貞	歌川国貞（三代目豊国）	1786-1864(79),	
水野年方	水野年方	1866-?,	
師宣	菱川師宣	1615?-1694? (77?),	
夢二	竹久夢二	1884-1934	
川瀬巴水		1883-1957,	
吉田博		1876-1950	

レオナルド・ダ・ヴィンチ	Leonard da Vinci	1452-1519	モナリザ、背景に橋が描かれている	イタリア、ルネッサンス期
ルーベンス	Petrus Paulus Rubens	1577-1640	バロック絵画	
ロラン	Claude Lorrain	1600-1682		フランスの画家、イタリアに定住
ロベール	Robert, Hubert	1733-1808		フランス
コロー	Corot, Jean-Baptiste Camille	1796-1875	ナルニの橋	フランス、バルビゾン派
ターナー	Turner,Joseph Mallord William	1775-1851		イギリス
ピサロ	Pissarro, Camille	1830-1903		フランス、印象派
マネ	Manet, Edouard	1832-1883		フランス、印象派
ドガ	Degas, Edgar	1834-1917		
シスレー	Sisley, Alfred	1839-1899		イギリス、印象派
セザンヌ		1839-1906		
モネ (*1)	Monet, Claude	1840-1926		フランス、印象派
ベルト・モリゾ		1841-1895		
ルノワール	Renoir, Pierre	1841-1919		フランス、印象派

	Auguste			
ギヨマン	Guillaumin, Jean-Baptiste Armand	1841-1927		
メアリー・カサット		1844-1926		
カイユボット (*2)	Caillebotte, Gustave	1848-1894	ヨーロッパ橋、1876	
ポール・ゴーギャン		1848-1903		
エヴァ・ゴンザレス		1849-1883		
ゴッホ,	フィンセント・ファン・ゴッホ	1853-1890		オランダ
レピーヌ	Lepine, Stanislas	1835-1892		
ベルナール、エミール	Emile Bernard	1868-1941		ポスト印象派
ボナール	Bonnard, Pierre	1867-1947		フランス、ナビ派
	Braquemond, Felix	1833-1944		
キンケード	William Thomas Kinkade III	1958-2012	風景画家	アメリカ

- (*1)モネはパリで生活するための経済的余裕が無かったため、1871 年代のほとんどをセーヌ河流域のアルジャントゥーユで過ごした。ここには、モネを訪ねてマネやシスレーも来て絵を描いた。
- 印象派の画家たちが集まったパティニヨール地区界隈に新しくできたサン・ラザール駅は、画家たちの格好の題材だった。その駅に架かる大きな橋をカイユボットは描いた。現在はヨーロッパ広場と呼ばれるその橋の中央からは、ヨーロッパの都市名を冠した 6 つの通りが放射状に延びているが、カイユボットが描いているのはウィーン通りから中心へと向かう風景。広角レンズで見たときのような急激な遠近法で描写されている。

ギュスターブ・カイユボット （フランス 1848～1894）「ヨーロッパ橋」 1876 年 油彩 カンヴァス 124x180cm ジュネーヴ プティ・パレ美術館

カイユボットは、いくども習作を重ねた末にこれを完成させた。消失点の前に描かれているフラヌール（散歩者）の紳士はカイユボット白身。一緒に歩く婦人に話しかける彼、そこに近づきつつある犬、ぼんやりと橋の下を眺める労働者、空へとのぼる蒸気機関辛が吐き出す白い煙。これらが一体となつて、映画のように動きのある画面が形成されている。

パリのポン・ヌフ
（Port-Neuf, Paris） 1902 年
65×81cm｜ 油彩・画布 ｜ ひろしま美術館（広島）

印象派の巨匠カミーユ・ピサロ晩年を代表する作品のひとつ『パリのポン・ヌフ』。画家が 1900 年から使用していたポン・ヌフのアトリエで制作された本作は、田園派と呼ばれた画家としては新鮮な都会的な画題となる、パリに現存する最古の橋≪ポン・ヌフ≫を描いた作品である。1880 年代の探求の時代を経て辿り着いた印象主義の画題への回帰として、かつてクロード・モネやルノワールがしばしば手がけたパリの景観（風景）をピサロが描いた本作では、大ぶりで荒々しいピサロ独特の筆触によって、セーヌ川にかかるポン・ヌフとそこを行き交う人々、そしてサマリテーヌ百貨店が見える対岸が横長の画面に描き込まれている。どんより雲がかかった空模様の中、移り変わる天候が織り成す光の動きやその効果を繊細かつ大胆に表現されるポン・ヌフの風景やセーヌ川の描写は 1900 年代のピサロ作品の特徴を良く示している。また色彩においても、全体的にグレイッシュな色彩・色調の中に差し色的な馬車の赤褐色を置くことによって都会的な雰囲気を描き出すことに成功している。なおピサロは≪ポン・ヌフ≫を連作的に描いており、本作以外にも 12 点≪ポン・ヌフ≫を描いた作品が確認されている。

■ カミーユ・ピサロ Camille Pissarro
1830-1903｜ フランス ｜ 印象派

印象派の最も中心的存在であった巨匠。八回開催された印象派展の全てに参加した唯一の画家で、豊かな色彩を用い大胆に筆触を残す描写法や、温柔で闊達な表現、ギュスターヴ・クールベに倣うパレット・ナイフを用いた絵画技法などによって農村風景等を描き、印象派を代表する画家として現代でも非常に高く評価される。1885 年頃よりジョルジュ・スーラやシニャックなどに代表される点描表現、所謂≪新印象主義≫の技法を取り入れるも、1890 年頃には原点へと回帰している。農村風景が主であるが、質実な人物像や肖像画、風俗的主題、静物画、自画像も手がけるほか、晩年には都市景観なども描いている。またカミーユ・ピサロは温厚な性格で知られエドゥアール・マネ、エドガー・ドガ、クロード・モネ、ルノワール、アルフレッド・シスレー、フレデリック・バジール、ギヨマンなど他の印象派の画家たちや、後期印象派を代表する画家ポール・ゴーギャンなど後世の画家らとも交友を重ねる（中でもポール・セザンヌにとっ

◆ルーアン、霧のサン＝スヴェール橋
1896 年 ｜ 油彩・画布 ｜60×81.3cm｜ ノースカロライナ美術館

ジャン=バティスト・カミーユ・コロー（Jean-Baptiste Camille Corot, 1796 年 7 月 17 日 － 1875 年 2 月 22 日）は、19 世紀のフランスの画家。
ナルニの橋 （1826 年）

風景画出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

概要ポンペイとヘルクラネウム（現在のエルコラーノ Ercolano）には 1 世紀頃のローマ帝国時代のフレスコによる風景の室内装飾が残されている。

伝統的な中国の ″純粋な″ 風景画では人物の姿は、非常に小さく描かれ、観る者をその風景の中に引き込みその壮大さを表すために描かれているに過ぎない。このような風景画は現存する墨による絵画が描かれた頃には、既に成立していた。中国の山水画は、10 世紀～11 世紀に李成、范寛、郭熙などの巨匠を輩出し、従来の本流だった人物画をしのぐ状況になった。

15 世紀初頭、ヨーロッパでも風景画はひとつのジャンルを確立した。それはまだ人物が活動する舞台としてではあったがエジプト逃避中の休息、東方三博士の旅、砂漠の聖ジェローモといった宗教的な主題の中で、風景がしばしば描かれていた。

17 世紀のオランダでは、豊かになった市民階級の家屋を飾る絵画として風景画が確立し、ヤーコプ・ファン・ロイスダールやメインデルト・ホッベマなどの専門的な風景画家が登場した。オランダの風景画は、国土が平坦なことから、空と雲が重要な要素となった。

19 世紀に入るとヨーロッパでは自然主義が主流となり、宗教的、歴史的な画題や理想化された風景を室内で描く従来の風景画を否定し、野外に出て直接観察しながら風景を描くバルビゾン派（カミーユ・コローやテオドール・ルソー）が生まれた。

19 世紀前半、旅行ブームが起きた日本では、浮世絵においても名所絵が流行し、葛飾北斎の『富嶽三十六景』や歌川広重の『東海道五十三次絵』などの傑作を生んだ。その大胆な画面構成や鮮やかな色彩は、19 世紀半ばに写真が実用化されたために写実主義に代わる絵画独特の表現方法を模索していたヨーロッパ美術界に大きな影響を与え（ジャポニスム）、印象派を生む契機の一つとなった。

ヨーロッパではジョン・ラスキンが気付き[1]、ケネス・クラーク卿が紹介したように、風景画は「19 世紀の主要な

る芸術創造」であった。この結果これ以降、人々は「自然美の鑑賞や風景画の製作とはわれわれの精神活動の正常な、永遠的な部分である」[2]と思うようになった。クラークの分析によると、ヨーロッパでは自然の複雑さをひとつの作品に表現する場合、基本的に次の 4 つのアプローチが有るとしている。象徴の受容、自然の事実に対する興味、深く根付いた自然に対する畏れを和らげる為のファンタジーの創造、再生できるかもしれない黄金時代の調和と秩序に対する憧憬。

米国では、19 世紀中頃から末にかけて活躍したハドソン・リバー派が風景画の最も知られている例だろう。彼らは理想とする叙事詩的絵画を実現するために巨大な作品を制作した。一般的にハドソン・リバー派の創始者と目されるトマス・コールは、ヨーロッパの風景画の哲学的な理想の多くを共有していた。それは自然の美に関する思索により得られる精神的な利益に対する非宗教的な信仰のような物だった。後のハドソン・リバー派の作家にはアルバート・ビアスタットのように生々しい、時として脅威となる自然の力を強調した作品を生み出すものが現れた。その作品にはロマン派的な誇張が強く現れていた。

探検家、自然科学者、航海者、商人、移住者たちがカナダの大西洋岸に現れた初めの頃、彼らは人を寄せ付けない厳しい環境と荒々しい海に行く手を阻まれた。彼らはこの厄介な土地を地図に写し、記録して自分たちの土地であることを主張することにより対処しようとした。この土地の特質と生物に関する彼らの理解には、非常に差があり、その観察には非常に科学的で正確な物から、風変わりな物、空想的な物までさまざまだった。これらの観察の結果が彼らの残した風景画に現れている。カナダの風景画の最もよい例は 1920 年代のグループ・オブ・セブンの作品に見出すことができる。

代表的な風景画展子虔、春の散策（600 年）
郭熙、早春図（北宋）
ピーター・ブリューゲル(大)、穀物の収穫（1565 年)[3]
メインデルト・ホッベマ、ミッデルハルニスの並木道(1689 年)

カミーユ・コロー、ナルニの橋（1826 年）

印象派の絵画は、現代でも最も人気の高い芸術ジャンルのひとつで、その作品は極めて高値で取引されることがある。

印象派の登場当初は、貴族や富豪らのパトロンを持たぬ画家の作品ということもあり、画壇での注目は低かったが、絵画市場や投機家によるもっぱら、経済絵画として扱われ始め、その後、世界の画壇を席捲するようにしている。

第 1 回印象派展の開催

1874 年にモネ、ドガ、ルノワール、セザンヌ、ピサロ、モリゾ、ギヨマン、シスレーらが私的に開催した展示会は、後に第 1 回印象派展と呼ばれるようになる。当時この展示会は社会に全く受け入れられず、印象派の名前はこのときモネが発表した『印象、日の出（Impression, soleil levant）』から、新聞記者が「なるほど印象的にヘタクソだ」と揶揄してつけたものである。このときを印象派の成立としているが、これ以前にもウィリアム・ターナー（イギリス）の様に印象派に通じる画風や、バルビゾン派など屋外の風景を多く描いた印象派前夜と呼び得る画家達も存在している。また、後にはスーラ、ゴッホ、ポール・ゴーギャンなどのポスト印象派、新印象派へと続くものとなった。

写真の発明による肖像画産業の低迷と、「見た感じ」の面白さに気付いたヨーロッパの画家たちは、写実主義から離脱し、絵画独特の表現方法を探索し始めた。 そのような中で、細部やタッチにこだわらず、新たな空間表現と明るい色使いを多用した印象主義が発生した。

印象派の絵画は、アカデミズムから開放され、キュビズムやシュールレアリスムなどのヨーロッパにおけるさまざまな芸術運動が生まれる契機となった。

印象派絵画の技法
印象派絵画の大きな特徴は写実主義などの細かいタッチと異なり、荒々しい筆致が多く、絵画中に明確な線が見られないことも大きな特徴である。また、それまでの画家たちが主にアトリエの中で絵を描いていたのとは対照的に、好んで屋外に出かけて絵を描いた。

以下の表は主な印象派の画家の一覧である。印象派展出品回の項目が空白になっているのは、その画家が一度も印象派展に出品しなかった事を示す。文献によって印象派の画家の分類が異なっているため、印象派と時期が前後している写実主義、バルビゾン派、ポスト印象派、新印象派の項目も参照されたい。

その阿蘇・益城・球磨の上流は火山や盆地を形成して、別天地の感をもたせ、奇怪と峻険の地として名高い。
五かの庄は、球磨川の上流の地の山谷深き九州第一の僻境といわれる所である。
椎原・久連子・樅木・葉木・仁田尾の五村からなり、北は矢部、南は五木江代、東は椎葉、西は種山、皆険阻で名高い地に囲まれている。
深山の谷地ともいう地で、平家の落人が住みつき、秀吉の頃までその存在が知られずにいたという所としても有名である。
「北斎漫画」七編の「肥後五ケの庄」から借用した図であることは知られているが、北斎は何から自身の図を得たかは明らかではない。

「最後の浮世絵師」小林清親は弘化四年（1847 年）御竹蔵の御蔵屋敷で生まれた幕臣で、鳥羽伏見の戦にも参加致しました。明治維新により失職した彼は、一時静岡に退去して、いろいろな仕事を致しますが、明治七年東京に戻り子供の頃から好きだった絵を学びなおして、後に「東京名所図」のシリーズ等を発表いたします。隅田川べりの風景を好んで描き、その作風は哀しいまでに懐かしく多くの人の心をひきつけました 13 番の久留里藩のところで紹介いたしました「大川端石原橋」を描いた井上安治は、小林清親の一番弟子で両人は明治の東京の風情をよく残してくれました。